

明るい農村

清水希容子

財団法人日本経済研究所 地域未来研究センター 研究主幹

山の麓にひろがる田んぼ。夏空に向かって青い苗が力強く伸び、秋晴れの下で稲穂は頭を垂れ黄金色に輝く。みずほの国・日本人のDNAを呼び覚ます、ほっとする“農村”の風景だ。

農業は、総生産額1%、就業人口5%と製造業や非製造業に比べ小さいが、国土に占める農地の割合は12%と大きく、森林(66%)とともに私たちの生きる糧を育み、環境や景観問題に大きな係わりを持つ。英語では「Agriculture」、直訳すると「耕す文化」である。戦後60年、農業は効率化を追求する歴史をたどった。鍬や鎌の手作業から、土を耕す、水をやる、田植え、稲刈り、乾かすなど一連の作業が機械化され、システム化や苗の品種改良が急速に進んだ。

機械化の一方で、古から伝わる知恵は変わらない。山から栄養分を含んだ水を田んぼに引き、持続的活用を可能とする。水不足には、天候予測をしながら上流と下流の人たちで配分する、水路が滞らないよう雑草を刈りすくう、田んぼに届いた水が水平に張られるように土を耕しあぜを整える。状況に応じて適切な量と質の肥料や農薬を撒いて耕す。土の固さにより使う道具が微妙に変わる。そこには、人と自然が交わり、知恵とコミュニケーションが存在する。

先代からの知恵を受け継ぎ、最新の技術の勉強に励んでいるのが、農業高校の生徒たちだ。農業専門の高校は全国に136あり(地図参照)、普通高校の中に農業学科を有する学校も多い。たいてい百年以上の歴史を有する。宮沢賢治の卒業した岩手大学(盛岡高等農林学校)や“Boys be Ambitious”(少年よ、大志を抱け)で有名な北海道大学(札幌農学校)の前身はともに農業学校だ。農業学校は、当時の基幹産業である農業の担い手を育成するため、地

元有志の寄付などによりつくられた。そのため、地域の産業界とは関わりが深く、産学官連携の手本となった。

明治37年、山梨県立農林高等学校は設立された。現在、システム園芸科、森林科学科、環境土木科、造園緑地科、食品科学科に、一学年一学科30名ずつ在籍する。17haの広大な敷地には、田んぼ、ビニールハウス、豚舎、実験棟、庭園など生徒たちの舞台が広がる。3年生の授業の半分は実験・実習で、学校や農業大学の指導者、技能を有する地元農家の人々から学び、朝夕、休日も汗を流す。

最近では、企業の協力を得て行われる実務研修が注目される。市場ニーズの把握、マネジメント能力、民間のノウハウを肌で感じる現場体験を重視したものだ。また、生ロールケーキで有名な地元の菓子店と一緒に地産フルーツを使った商品開発も行われており、ものづくりの発想力や企画力を養う。生徒には、原料から吟味するプロセスを経て何を大事にするか、こだわりが芽生えてくるといふ。

校内に売店を開設し、生徒自らの作物を販売したり、動物たちをつれてイベントに参加したり、地域住民との交流も盛んだ。宇宙に持っていった大豆がどのように育つか調べる研究は、高校生ならではの。石坂正継校長は、「夢と希望を抱いた生徒たちは、目的意識をもって、毎日はずらつと“生き物”とともに学んでいる」と、うれしそうに語ってくれた。

全国の農業高校生たちは、雨の日も風の日も365日休むことなく、地域を耕しつづけて文化を伝承している。“農”とは、単なる農家や農業のことではない。人間らしい生活を営むために、決して失せてはならない『農村』である。農村の明るい未来がこの国を支えている。

